

激動の経営

先頭走る膜材

中興化成工業のフッ素樹脂製品は幅広い産業分野で利用される。その中で多くの生活者の目に触れるのが建築用膜材だ。1983年に恒久的な建築物用と

中興化成工業

③

して国内で初めて受注を決め、市場の先頭を走ってきた。北京五輪の開閉式会場「国家スタジアム（通称「鳥の巣」）の天井などにも2008年の夏季五輪以来用いられ、選手らを見守っている。

「チューコースカイ」の名称で展開する膜材は、ガラス繊維クロスにフッ素樹脂をコーティングした厚さ0・23ミリの「膜材の素材。それまでテープやベルトで培った技術を基に72年に研究に着手。81年に製品として

活躍の場 世界に



今秋開業予定の西九州新幹線・長崎駅（長崎市）。中興化成工業の膜材が採用された。新幹線駅として唯一の膜屋根で、夜間は下側からのライトアップで照らされる見込み

建築基準法に認定された。

10カ国で採用

社長の庄野直之は「法律が想定しておらず、建設省（現国土交

通省）の協力も得て試験方法からつくった」と、当時の新規性の高さを説明する。

88年完成の「東京ドーム」を皮切りにグローバル展開が加速。採

成長分野、意欲的に開拓

光性や耐候性、軽さなどが評価され、内外の代表的な施設で採用が進んだ。10カ国1000カ所以上のスタジアムや空港、駅、商業施設で存在感を示す。

扱いが難しい樹脂のコーティング技術はフッ素以外にも派生。現在は譲渡したが、自動車用エアバッグの素材製造にも生かされた。

強み最大化

膜材は22年秋に開業予定の西九州新幹線・長崎駅でも採用された。駅では透光性の良さを生かし、屋根は下からライトアップされる見込み。美しい夜景

で知られ、中興化成の地元と言える長崎に新たな彩が添えられる。一方で、縁の下の方

「引く手あまた」（庄野）の領域だ。半導体製造で用いる薬液にも変質しないフッ素樹脂は、洗浄槽やタンクとして威力を発揮する。庄野は「洗浄装置は日本が間違いなく強い」とし、「原料の樹脂、加工、装置メーカーの三つがそろってこそ強みは最大化

する」と力を込める。熊勢強化にも積極的だ。主要拠点・松浦工場（長崎県松浦市）では近年、切削加工の内製化や溶接工程の効率化など生産を高度化している。供給先である装置の能力向上に伴っても、「高負荷に耐える製品開発、パーティクル（微細な塵）の発生を極力ゼロにするクリーン化を進める」とさらに高みを目指す。

自動車や医療機器、第5世代通信（5G）など成長分野の拡大に伴う需要は旺盛だ。中興化成の活躍の場は広く、深くなっている。（敬称略）